『タンド伯爵夫人』の特異性

森 本 信 子*

序

現在ラ・ファイエット夫人の小説とされているのは『モンパンシェ公爵夫人』『ザイード』『クレーヴの奥方』『タンド伯爵夫人』の4作品である[1]．この中で17世紀前半に流行した英雄的行為や牧歌的世界を描く大河小説の流れを引き継いでいるとされる『ザイード』は，他の3篇とは一線を画しており，本論考では扱わない．またラ・ファイエット夫人はこれらの小説以外に『アンリエット・ダングルテールの記録』『1688年89年におけるフランス宮廷の記録』という2編の記録を残している．そもそも，ラ・ファイエット夫人の小説群は，16世紀の記録作家ブラントーム，17世紀の歴史家メズレェの著作から，16世紀を舞台にした題材を取り入れたものである．ラ・ファイエット夫人にとって，歴史的事実の記録が小説の源泉となっており，彼女が自分の周囲におきる諸事件の記録としての歴史記述に向かうことは必然であった．これら2編のうち，晩年に書かれた『1988年89年におけるフランス宮廷の記録』が軍隊や諸事件の公的な記録といった趣が強いのに比べ，ルイ14世の王弟妃アンリエットとの親交から生まれた『アンリエット・ダングルテールの記録』は，マザランの台頭を中心とした歴史の記述に加えて，ルイ14世やアンリエットの結婚と恋愛関係が詳述されている点で，小説との類似性が強い．ラ・ファイエット夫人は，16世紀の歴史を好みそれを題材として小説を書く一方，歴史的事実の記録を同時に実践していたのである．こうして彼女は，小説が歴史的事実，歴史上の実在の人物を骨格として展開される歴史秘話という，現代にも通じるジャンルを確立した．

当時，現実の人物をほのめかす小説『ル・グラン・シリュス』が流行し，サロンでは登場人物のモデル当てが盛んに行われたという[2]．この小説では実在の人物がなぞらえられるのは古代の英雄たちであり，無害な楽しみとして成り立っていた．一方，ラ・ファイエット夫人の3篇の小説はいずれもすぐ前の世紀である，16世紀のフランスを舞台とし，登場人物の子孫達がまだ生身で活躍している時代である．史実に忠実に筋を運べば名誉毀損といった問題が起こる可能性もあったはずである．歴史的事件はそのままに，実在の人物，架空の人物，また実在の人物の周囲から借用した名を持つ別設定の人物などが複雑に入り組むラ・ファイエット夫人作品の構成は，モデルの詮索を避けるという実用的な目的があったかもしれない．その結果，歴史は記述の目的そのものから後退し，人間関係と心理が交錯する新たな虚構の世界を本当らしく見せる装置となった．ラ・ファイエット夫人が『クレーヴの奥方』について手紙で「とりわけわたくしの目を引きますのは，宮廷社会とそこでの生活ぶりが完ぺきに写し出されていることでございます．ことさらものがたりめかしたところや，実力以上に作りあげようとしたところがすこしもございません．ですからこれは小説ではなく，メモワールというのにふさわしく，わたくしの耳にしたところによれば，もともとそういう題名であったものを，変えてしまったそうでございます」と述べているように[3]，「メモワール」つまり記録への意図は明確である．しかし記録の対象と熱意は16世紀の歴史自体というよりむしろ，言葉のやり取り，権力関係，恋愛，結婚，心理など，歴史に隠れた人間の「生活ぶり」つまり真実の姿に向けられているのである．

出版の順序を追うと，『モンパンシェ公爵夫人』が1662年，『ザイード』が1670年，『クレーヴの奥方』が1678年，『タンド伯爵夫人』のみラ・ファイエット夫人の死後，1724年である．本論考で特に焦点を当てる予定の『タンド伯爵夫人』が，『モンパンシェ公爵夫人』と『クレーヴの奥方』の2作品に対し，執筆時期がどういった関係になるか

＊薬学部　第4英語教室

は，これまで様々議論されてきた．主人公の夫への告白という観点から出版された順序どおりであるという意見や，姦通をめぐる道徳という観点から『クレーヴの奥方』が最後であるという意見がある．この議論に終止符を打つには，決定的な資料が新たに発見されることが必要だが，現在まだどれも憶測の域を出ない[4]．筆者は，本論考で示すように，『タンド伯爵夫人』には他の作品とは明らかに異なる点がいくつか見られることから，ラ・ファイエット夫人の最後の作品ではないかと考える．『タンド伯爵夫人』という作品は従来芸術性が低いとして注目されなかったが，その特異性に焦点を当ててみると代表作『クレーヴの奥方』とは異質な主題が浮かび上がる．

1　歴史と小説

『モンパンシェ公爵夫人』と，『クレーヴの奥方』の両作品に見られる特徴は，歴史の大枠が提示された後，小説の筋が歴史的事件の進行と不可分な関係を維持しながら推移することだ．『モンパンシェ公爵夫人』の中で，登場人物たちはシャルル９世治下における新教徒と旧教徒の内戦に巻き込まれ，「パリの攻囲戦」「サン・ドニの戦い」「サン・バルテルミーの日に行われた計画」「新教徒大殺戮」と続く戦乱と緊密な関係に置かれる．バロック期の牧歌小説を髣髴とさせる「まるで小説中のできごとのよう」な登場人物たちの出会いも，殺伐とした戦いの合間にはめ込まれている．内戦が新教徒の大虐殺という残忍性を帯びていく中で，モンパンシェ公爵夫人の恋愛も破滅に向かっていく．

『クレーヴの奥方』での歴史と小説世界はさらに緊密に絡み合う．時代は，『モンパンシェ公爵夫人』の背景となった時代より前，カトリーヌ・ド・メディシスがまだ王妃であったアンリ２世治下である．この作品では，人間が歴史に翻弄される『モンパンシェ伯爵夫人』の示した方向性に，恋愛と政治との不可分な関係を通して，人間が歴史に関与する方向性が重ねられる．冒頭でのアンリ２世，王妃，愛人が形成する歴史的事実としての三角関係が，クレーヴ夫人を中心とする三角関係と響きあい，さらにここに，登場人物たちによって語られる挿話における三角関係が加わる．これらが呼応して重層的な構造を作る[5]．こうして歴史的な時間と人物達が過ごす小説固有の時間とが共鳴しあい，作品全体が新しい世界を提示するのである．

一方カトリーヌ・ド・メディシスの摂政の初めの年から始まる『タンド伯爵夫人』は，『モンパンシェ公爵夫人』と同じシャルル９世の時代でありながら，激化する内戦に関する記述がほとんどない．また，『クレーヴの奥方』に頻出した歴史上の事実としての恋愛話も全く出てこない．この作品では，タンド伯爵夫人，タンド伯爵，愛人ナヴァル公，ナヴァル公の妻ヌーシャテル夫人の４人が形作る逃げ場のない二重の三角関係のみに焦点が当てられる．タンド伯爵とタンド伯爵夫人は実在したといわれているし，小説中の登場人物の運命も歴史的事実や政治に無縁ではないが，作者ラ・ファイエット夫人の関心が歴史とは別のところにあることははっきりしている．『モンパンシェ公爵夫人』と『クレーヴの奥方』において小説世界を象徴し重層化していた歴史記述の役割は，この小説では大きく後退している．小説中に歴史を配置する効果を犠牲にして，ラ・ファイエット夫人はあえて単旋律的な展開を選んだ．そこから，他の作品の「要約」ではないかといった意見[6]や，「習作的」[7]といった意見が生まれたことは納得がいく．しかし，筆者は，作者が余分なことを一切省きある意味では芸術性までも犠牲にして語りたい主題を持っていたために，このような単純な構造の作品が生まれたのではないかと考える．

2　夫を愛せる妻

結婚が家門の繁栄や出世のための有効な道具であるという考え方は，３篇の小説で一貫して見られる．『モンパンシェ公爵夫人』において，メジエール嬢は，ギュイーズ家とブルボン家の権力闘争の中で，ブルボン家の画策が功を奏してモンパンシェ公と結婚する．すでにギュイーズ家の長男と恋愛関係にあったにもかかわらず彼女自身もこの結

婚を受け入れる.『クレーヴの奥方』では，シャルトル嬢の結婚は，ギーズ家，モンパンシェ家に王の愛人の介入まで加わり，他の求婚者が手を引いたのに乗じて，シャルトル嬢に恋するクレーヴ殿との間で成立する．結果的には恋愛の結実であったこの結婚も，宮廷の派閥争いと愛憎関係があったからこそ可能であったという意味では，政略結婚の一形態である.『タンド伯爵夫人』では，王妃の近親である名門の娘ストロッチ姫の結婚を巡る家門同士の闘争の有無は書かれていないが，タンド伯爵が裕福な宮廷貴族で妻よりかなり年長であることから，彼らの結婚が政略結婚であることは確かであろう．伯爵夫人の愛人となるナヴァル公が未亡人ヌーシャテル公爵夫人に接近するのははっきりと「野心」からである．結婚とは宮廷における地位と財産のやり取りの場であり，恋愛とは全く別次元にある．

ところで,『クレーヴの奥方』に登場するシャルトル夫人，つまりクレーヴ夫人の母は,「夫を愛し夫だけに愛されるという女の唯一の幸福」と「貞淑な女の一生はどのようにいつも静穏であるかということ」を娘に教えた．この教育は，結婚の次元に恋愛を持ち込むという根本的に不可能な状態を目指したものであり，前述した宮廷社会における結婚観からすると本質的な誤りを含んでいる．クレーヴ夫人は夫を尊敬することはできても恋することはできず，ヌムール公との恋愛に向かう．一方，夫であるクレーヴ殿は，結婚後も「夫らしくもない」情熱で妻を愛し続けるが，ついに夫人から愛されることなく死を迎える.「夫を愛し愛されるという女の唯一の幸福」は，幻想でしかなかったのだ．シャルトル夫人の絶望とその死は，恋愛と結婚の完全な一致の不可能性を象徴するものである．

モンパンシェ夫人はもちろんのこと，母の熱心な教育にもかかわらずどうしても夫を愛することができなかったクレーヴ夫人とは異なり，タンド伯爵夫人は，少なくとも結婚後しばらくは夫を愛する妻であった．このとき夫が妻を愛していれば，結婚と恋愛は見事ひとつに溶け合っていたはずである．タンド伯爵夫人は，シャルトル夫人の言う「夫を愛し愛されるという女の唯一の幸福」へと向かう可能性，結婚と恋愛の垣根を乗り越える契機を確かに持ち合わせていたのである．夫を一途な情熱で愛すことができたという事実はタンド伯爵夫人の不義密通に対する一種の免罪符となる．

3　愛人の死

ラ・ファイエット夫人の作品では，恋愛は成就ののちやがて消滅するという，消費的な精神の運動として提示される．たとえば『モンパンシェ公爵夫人』のギュイーズ公は，夫人との密会の後時間の経過とともに別の女性を愛するようになる.『クレーヴの奥方』のヌムール公の愛情は，クレーヴ夫人に面会を完全に拒否されたのちやがて冷めていく．愛情を持続的に持つことのできない移り気な愛人像はラ・ファイエット夫人の作品に共通するものだ．

ところが，タンド伯爵夫人の愛人ナヴァル公の場合は，その死によって，恋愛が持続するかしないかという問題が不問に付される．ナヴァル公は，ヌーシャテル公爵夫人との結婚を首尾よく成功させた恋愛の達人である．夫人との密会の最中にタンド伯爵に踏み込まれても言葉巧みに危機を回避できる処世術に長けた人物でもある．もし死ななかったら，他作品の愛人達同様，情熱はやがて別の対象を求めて移り行くのではないか，と思わせる人物として描かれている．ナヴァル公が死ぬことで，恋愛関係に不可避な消滅の未来は消え，情熱の痕跡だけが記憶として残される．死という絶対的な終焉によって，ナヴァル公とタンド伯爵夫人の恋愛関係はおなじみの恋愛法則とは別次元のものとなり，一挙に永遠性を帯びる．

4　恋愛と貞操

『モンパンシェ公爵夫人』は「もっとも美しい貴婦人の一人であったし，もし貞操と慎重さにみちびかれていつも生きていたら，そのなかでももっとも幸福になりえたひとだった」という文章で締めくくられている．作者は，夫以外の男性との恋愛を避けられなかったモンパンシェ公爵夫人を，貞淑でもなかったし慎重でもなかったといって非難

する．だが小説前半では，モンパンシェ公爵夫人は夫に対する貞淑の概念をはっきりと持っていた．少女時代の恋人ギュイーズ公との再会の後もしばらくの間は慎重に対処している．「貞操と慎重さ」を捨てるきっかけとなるのは嫉妬である．ギュイーズ公と内親王の結婚話のうわさが聞こえてきたのである．障害によって強まる恋愛の法則はここでも生きている．仮面舞踏会で，耳打ちする相手を間違えるというモンパンシェ公爵夫人の軽率な行為を引き出しているのも，内親王への嫉妬である．この小さな過失からのちはモンパンシェ公爵夫人の自己反省が見られなくなり，盲目的に恋愛に突き進んでいく．恋愛が貞操を凌駕するのである．

同じような恋愛において「貞操と慎重さ」を保ちえるならばどのような幸福が待っているかを描いたのが，『クレーヴの奥方』であるといえよう．クレーヴ夫人がヌムール公への好意を隠しきれず周囲に秘密の恋愛が知られる，あるいはヌムール公との関係が深まる可能性のある場面はいくつかある．彼女がモンパンシェ公爵夫人と異なるのは，自分の行為に対して後悔と反省を繰り返す冷静な時間を，最後まで失わないことである．クレーヴ夫人は，会ってしまえば理性による決意など簡単に覆されてしまうという明確な認識を持っている．夫への義務としての貞淑に関する母シャルトル夫人の熱心な教育も大きく影響し，彼女は視線の交換も含めた恋人とのすべての情報伝達を拒み続ける．こうして，恋愛に引き込まれずに，静寂の生活を保持できた．作者はクレーヴ夫人にはっきりと「あたくしは恋のままに導かれはしますが，それで盲目にはなりません」と語らせている．貞操を守るために，情報が氾濫する宮廷社会で情報の遮断という決断を下せたことによって，クレーヴ夫人は「ほかに類のない貞淑の鑑」となりえたのである．

『タンド伯爵夫人』は夫婦間の貞操という概念を打ち壊すところから始まるため，そもそも貞操と恋愛との葛藤が見られない．妻が夫を愛し始めたにもかかわらず，夫には愛人ができることが冒頭すぐにかかれている．恋愛は結婚生活にとって禁じられたものではないという前提からこの小説は始まっているのだ．やがて愛人のできるタンド伯爵夫人は「色恋から生じる恥や不幸」「自分の落ち込もうとする深淵」を恐れるが，夫に対する貞淑の観念がはっきり記述されてはいるわけではない．友人ヌーシャテル夫人を裏切っているという自責の念と，愛人の前途を妨げはしないかという心配への言及はあっても，夫に関する言及はない．恋愛と貞淑との葛藤が希薄であるその結果が密通であり，妊娠である．断固として恋人を避けたクレーヴ夫人はもちろんのこと，最終的には抵抗しきれなかったが幾たびかの躊躇を見せたモンパンシェ公爵夫人とは異なり，タンド伯爵夫人の恋愛過程には貞淑への罪悪感が見られない．

葛藤の不在は，いわゆる教育者の不在と呼応している．この小説には，娘に貞淑を繰り返し説いた『クレーヴの奥方』のシャルトル夫人や，モンパンシェ公爵夫人を一人前の淑女に仕立て上げた『モンパンシェ公爵夫人』におけるシャバンヌ伯のような，教育を担う人物が全く登場しない．シャルトル夫人とシャバンヌ伯は全く異なる性質の助言者ではあるが，不義の恋愛を本人以外に唯一知る者という共通した役割を持つ．彼らはともに，主人公の恋愛を相対化する視点を提供する．タンド伯爵夫人の場合，結婚後次第に容姿，機知ともに洗練された女性へ変貌していくのは他の２編と同じだが，その過程に他の人物の介入の気配がない．また，ナヴァル公との恋愛は，誰一人として他者の関与も助言も苦言もなく，完全な秘密として進行し，外部との接点を全く持たない閉じられた関係の中で自己増殖する．批判的な他者の視点の不在が，妊娠発覚までタンド夫人が貞淑への違反という罪悪感を持たなかった理由の一つとなっている．

5　許し

ラ・ファイエット夫人は，不幸と断罪したモンパンシェ公爵夫人に欠けていた「貞操と慎重さ」を付与し，「貞淑」の模範として，クレーヴ夫人を創出した．理性によって恋愛と貞操との葛藤を克服するクレーヴ夫人の生涯を描くことは，婚外の恋愛を容認する風潮にあった当時の宮廷社会に対する異議申し立てでもあり，教育でもあったことだろう．しかし，道徳的模範として描かれるクレーヴ夫人は，果たして「幸せ」だっただろうか．その答えは小説中には

現れない．病気により諦観に達した夫人が，静かに一生を終えたことはわかっても，妻としての義務を果たしているという満足感以外に幸せを感じることがあったかどうかは読者の想像に任せられている．この静かな時間をどう過ごしたかについては，修道院と家の往復以外には何も書かれていない[8]．

それに比べ，タンド伯爵夫人は，愛人の子供を妊娠し，死産したのち亡くなるが，彼女の死は「めったにない喜び」を伴っていたと書かれている．不義密通という，道徳上最大の罪を犯しながら幸せであるという自覚を伴いながら亡くなっていく．なぜだろうか．それは彼女が自分の罪を悔い改めているからである．

まず，夫への告白について考察してみる．クレーヴ夫人の告白は，夫との会話の流れの中で偶然の要素がぬぐいきれない状況で行われている．タンド伯爵夫人の告白は手紙によってなされる．手紙は自己反省と言葉の選択を要求し，ひとたび書き留められた内容は確定的なものとして残る．徹夜で手紙を書き終えたタンド伯爵夫人は，それが夫の手に渡る様子を自室の窓から見ている．自分の運命を完全に夫に託し，罪の裁きが下るのを静かに待っているのだ．自らが犯した罪を認め，裁かれることを自ら求めるタンド伯爵夫人の告白は，自分が貞淑であることを証明するためになされたクレーヴ夫人の告白とは全く異なる性質を持つ．これは一種の懺悔である．

夫の返事を受け取ってからの夫人は「恋のためにいつも示したとおなじ熱烈な気持で，徳と悔い改めに心を注いだ．奥方のたましいは苦悩のうちに迷いがとけ，きれいに洗われたようになっていた」と書かれている．「徳」は「貞操」と同じ la vertu というフランス語で，この小説に希薄だった概念が突如大きな意味を伴って現れる．すでに妊娠している夫人にとって la vertu はもはや社会通念としての妻の「貞操」ではありえない．ここではもっと人間一般の本質的な善性に関わる意味合いを帯びていることは，「悔い改め」la pénitence という明らかにキリスト教の用語と同列におかれていることからもわかる．妊娠に絶望して自殺を願った夫人を思いとどまらせたのが「キリスト教」le christianisme であったとはっきり書かれてもいる．タンド伯爵夫人の言葉に色濃く表れるようになるキリスト教的な概念は，信仰が登場することはなかった他の2作品とくらべてきわめて異色である．夫以外の男の子供の妊娠はごまかしようのない罪，社会的に許されない罪そのものである．また，妻の不義と妊娠を知った夫の驚き，落胆，怒り，復讐心は，社会通念を凝縮したものである．一方彼女は，夫を愛したこともある女性で，恋人の死を悲しむ人間でもあり，完全に性悪な人間ではない．こうして，タンド伯爵夫人は，善良さと罪を同時に抱える人間の象徴となる．どんな人間でもキリスト教的な「徳」と「悔い改め」を求めれば「きれいに洗われたよう」な心を持つことができるというのだ．タンド伯爵夫人のような許されざる人間が，人生の終わりに，「めったにない喜び」を感じることができたというこの逆説こそ，ラ・ファイエット夫人がこの作品で描こうとしたことではないだろうか．

6　寛容な夫

『モンパンシェ公爵夫人』におけるモンパンシェ公の人物像は明確ではない．そもそも家同士の権力闘争の末成立した結婚であり，結婚する当人は闘争の道具に過ぎなかった．嫉妬，憎しみ，不機嫌，怒りといった感情以外にはほとんど記述がない[9]．友人シャバンヌ伯とは固い友情関係を結ぶが，サン・バルテルミーの虐殺に巻き込まれて死んだシャバンヌ伯の遺体を前に，最後には「喜び」を感じる人間であり，夫としての立場を超えて描かれることはない．そもそも，シャバンヌ伯と妻とのあいだに密通があったというのは完全な誤解であり，モンパンシェ公爵は最後まで真実から遠い人物のままである．モンパンシェ公爵夫人に対する悲劇的な愛情のせいで理不尽な死を迎えるシャバンヌ伯が「たいへん立派な人物」「やさしい人ずきのする気質」と形容され，人格上の欠点が書かれていないのと対照的である．

『クレーヴの奥方』の冒頭，宮廷における主だった人物の素描では，クレーヴ殿は次のように評される．「ヌヴェール公もまた戦場の功名と務めたかずかずの栄職によって一生を輝かしくしている太守であって，もう老人であるとは

いえ宮廷ではやはりはなばなしいひとである．公に三人男の子があった，それぞれ美男子だった．なかでも次男のクレーヴ殿といわれるのはこの継いだ名誉ある名にふさわしい立派な青年なのである．勇敢で鷹揚でしかも若さに似ぬ慎重な性質だった．」クレーヴ殿は小説の展開の中で，ここに書かれた人物像を裏切ることはなく，読者の共感を呼ぶように描かれている点で，陰険さばかりが際立つモンパンシェ公爵と全く異なる．好感の持てる人物であるがゆえに，結婚後も妻に抱く熱烈な愛情が満たされることなく，絶望のうちに亡くなる様が悲痛なのである．ただひとつ，妻と愛人ヌムール公の間に密会があったという誤解が未解消のまま小説が終わるという点は，愛情の深さゆえに犯した失策であるものの，モンパンシェ伯のシャバンヌ伯への誤解の未解決と類似している．

『タンド伯爵夫人』のタンド伯爵は，きわめてバランスの取れた欠点のない人物である．冒頭で「伯爵は裕福で姿も堂々として，もっとも派手に家をかまえている宮廷貴族であった．やさしくて愛されるというよりは敬意をはらわれるにふさわしい人である」と評される．結婚当初は夫人を子ども扱いして愛人まで作るが，魅力を増した夫人に次第に惹かれていく．クレーヴ殿同様に夫人を「妻ででもない人のように」愛し始めたタンド伯爵が，クレーヴ殿と大きく異なる点は，その愛情が報われないと知るときっぱりと妻から離れることのできる理性を持ち続けることだ．タンド伯爵夫人の愛人ナヴァル公が別の女性ということにした恋愛相手について，「聡明でもなく勇気もなく思いやりさえない人」との判断を披露するタンド伯爵が，夫婦の安定した関係を維持することを重んじていることは確かである．タンド伯爵の冷静な洞察力は，ナヴァル公の死を伝えたときの妻の涙から，二人の関係を見抜く場面にも現れている．妻の姦通を少しも疑っていなかったが故の驚きと怒り，復讐心にさいなまれるが，軽々しく行動に移すことはしない．妊娠についての妻の手紙を読んだのちの伯爵の苦悶は繊細な心理描写に満ちている．特筆すべきは「どこか愛情の混じった苦痛」を我にもあらず感じたという部分だ．この時期，妻に対する恋愛感情は激しいものではなかった．とすると，この「愛情」とは，恋慕ではなく，妻への憐憫ではないだろうか．手紙を書かざるを得なかった妻の苦悩への思いやりと取れる．夫人の訃報に際して感じる「喜び」は裏切られた夫としての当然の感情だが，それと同時に感じた「あわれみ」の気持ちは，タンド伯爵の寛容さを表すものだ．また，この「あわれみ」をタンド伯爵夫人が夫に求めた「許し」との関連で考えると，罪に対する慈悲という，宗教的な許しの可能性を示唆しているとも考えられる．罪深い一人の人間が死に際して求めた許しを聞き入れたのではないか．タンド伯爵は，裏切られた夫という世俗的な位置から完全に抜け出るわけではないが，寛容の可能性を体現する人物として浮上し，冒頭の「敬意」の対象となるべき人物という言葉と呼応する．再婚しなかったと書かれるタンド伯爵にとって，夫人の記憶は決して「いとわしいものでしかない」わけではなかったのではないか．「長寿をまっとうした」という言葉が示す時間の経過が，タンド夫人への静かな鎮魂歌となっている．

時間の概念は，小説のいくつかの場面で見られるタンド伯爵の決断の先延ばしの中にも現れ，この小説で重要な意味を持っている．タンド伯爵は，妻の様子からナヴァル公との情事を一瞬にして悟るが，妻の処遇についての決定を棚上げにして，空間的また時間的な距離を置こうとする．告白の手紙への返事でも夫婦としての名誉を守るための方策だけを指示して夫としての処罰の決断は先送りする．慎重である反面，単なる時間稼ぎとも言えるこうした態度に確かなのは，時間への信頼である．最終決定を先延ばしにして慎重に事態を見守る態度はタンド伯爵に特徴的であり，それによって夫人は安らかな死を迎え，彼自身も長寿を全うすることができた．時間の力を信じれば生き続けることができる．長い時間のうちにかならず起こる様々な物語を見届け，受容することができる．時間の信奉者タンド伯爵が生き続けることによって，過去が重なって現在をつくり未来へとつながる時間の分厚い層への肯定感がこの悲劇的な小説を静かに包み込む．

結論

『モンパンシェ公爵夫人』や『クレーヴの奥方』との比較の中で，『タンド伯爵夫人』の特異性をいくつかの点で検討してきた．歴史の扱いは最小限で，登場人物は主人公，夫，愛人，愛人の妻を加えた平行四辺形の関係に限定されている．歴史上の事件や人物，人間関係を多様に配置して複合的な構造を目指す他の2作品と比べて，この作品では副次的な要素を極力省略することによる構造の単一性が際立っている．

人物の造型や死の扱いなどにおいて，『タンド伯爵夫人』の独自性が見られた．なかでも，主人公の視点から捉えた主人公の死が描かれている点は重要である．モンパンシェ公爵夫人とクレーヴの奥方の死は，彼女たち自身がそれをどんな心境で受け止めたかについては記述されず，世間の評判を代弁する形で語り手が締めくくる．『タンド伯爵夫人』では，「許し」という宗教的な概念も含む人生最後の精神生活のあり方がきちんと描かれている[10]．

『タンド伯爵夫人』を解釈する上でもうひとつ重要なのは，妻を失った夫のその後の時間への言及である．他の2作品とは異なり，妊娠という疑いようのない密通の証拠，またその事実の手紙による夫への告白など，この小説の悲劇は避けがたいものとして起こり，一気に結末に突入していく．そして最後の「長寿をまっとうした」という文章が示唆する持続の中にすべてが吸収されていく．筋の運びの速度感と余韻は，この小説に独特のものだ．

この小説が，その簡潔性や，装飾性のなさから，よく言われるように『クレーヴの奥方』の原型として書かれたという議論を完全に否定することはできない．アンドレ・ボーニエはラ・ファイエット夫人の手紙を根拠として1664年に『タンド伯爵夫人』が書かれたとしている[11]．もしそうだとすれば，1634年生まれの作者がちょうど30歳のときの作品ということになる．この場合，これほど死の影が強く死の受容の有様まで描かれた小説をこれほどの若さで書くことができるかという疑問が残る．恋愛関係の有無をめぐって名前の挙がるラ・ロシュフーコーが死んだ1680年以降にこの作品が書かれたと推定するのはサント・ブウヴだが[12]，筆者はこの意見が妥当ではないかと考える．1683年49歳のときに夫を亡くして未亡人となったラ・ファイエット夫人は，その10年後1693年，59歳で亡くなる．晩年といってよい年齢に達したラ・ファイエット夫人が，情念に引き寄せられるままの恋愛が行き着く悲劇を，主人公への批判的視点を廃して淡々と描いた作品だと考えることができるだろう．道徳的でない物語をそのままの形で書くという態度には，小説に教育的効果と楽しみを求めた17世紀の読者の好みに応えようという気配が見られない．そんな配慮とは別のところにこの作品を書いた意図があるように思われる．タンド伯爵夫人が罪を重ねた上にたどり着いた宗教的境地に，作者は生きることと死ぬことの意味を見出そうとしたのではないだろうか．人間は誰しも多かれ少なかれ罪を背負った存在である．その逃れられない運命を謙虚に認めることによって静かで安らかな死を迎えられれば，それはひとつの幸福の形である．死が不道徳に対する罰としての意味を超えて，許しのひとつの形となり，罪に満ちた生に意味を与える契機となることを示すという，作者の新しい試みが『タンド伯爵夫人』といえよう．

注

1．これらの小説の邦訳とフランス語版はそれぞれ以下のテキストを参照する．

生島遼一，『クレーヴの奥方』岩波文庫，1980年．

Madame de Lafayette: *Romans et Nouvelles*, Edition Garnier Frères; 1970.

2．Hary Ashton: *Madame de La Fayette, sa vie et ses œuvres*, Cambridge University Presse, 1922; p.66.

3．藤森文吉，『「クレーヴの奥方」の告白の場について』早稲田大学文学部綜合世界文芸研究改編「綜合世界文芸Ⅷ」（昭和29年7月1日発行）．

4．執筆順序の議論については荻原茂久『記録と小説とのあいだ』（北樹出版）118ページから127ページに詳しい．

5．Jean Rousset: *Formes et Significations*, Libraire José Corti, 1979; pp.28-36.

6．Emile Magne: *Le Cœur et L'Esprit de Madame de Lafayette*, Emile-Paul, Paris, 1927; p.280.

7．生島遼一，『クレーヴの奥方』岩波文庫，301ページ．

8．映画『クレーヴの奥方』（マノエル・ド・オリヴェイラ監督，キアラ・マストロヤンニ主演，1999年）では，アフリカでの奉仕活動に費やされることになっている．

9．荻原茂久はモンパンシェ伯爵の人物像は，ラ・ファイエット夫人がこの小説の執筆当時親しかったアンリエット・ダングルテールの夫である王弟に極めて似ていることを指摘している（荻原茂久，『記録と小説とのあいだ』北樹出版，2000年，78ページ）．

10. この点も，『タンド伯爵夫人』がラ・ファイエット夫人の晩年にかかれたものではないかという考え方の根拠になりうる．

11. André Beaunier: *L'Amie de La Rochefoucauld*, Ernest Flammarion, 1927; p.44.

12. Sainte-Beuve: *Portraits de Femmes*, Œuvres Ⅱ, Edition Pléiade, Gallimard, 1951; p.1236.